

ノース・スピリット湖ファースト・ネーション元族長 サリー バンティング（報告原稿）

こんにちは。ブーシュー（オジ・クリー語）。ハロー。

サリー・カケカガミック＝バンティングと申します。カナダのオンタリオ州にあるノース・スピリット湖の長老です。当時、名前がなかったオンタリオ州北部の小さい村で生まれました。1951年4月24日に、母のナセン・レイと父のボイス・レイの下、小さいティピーの中で生まれました。当時は、この北部の出身村には、診療所や病院、建物がなかったです。出産の手伝う助産師や医師もおらず、コミュニティの長老たちや薬師たちのサポートだけが頼りでした。この小さな北部の村は、現在のノース・スピリット湖に当たります。

当時は、私たちは土地を頼って生活し、食べ物を探しながら移動しました。2～3週間毎に新しい場所に移りました。祖父母は、生きていくために必要なことをすべて教えてくれました。例えば、狩猟、罠捕獲、釣り、料理、魚やヘラジカなどの手に入る野生の肉などの燻製です

夏場は、ベリー類や地元の食用植物を食べて生活していました。切り傷、便秘、痛み止め、発熱のような風邪やインフルエンザの症状などを治す薬として使っていた植物もありました。2歳の時に母が亡くなり、父が結核でサンダーベイに住んでいたため、私が祖父母と暮らしていました。父は私が5歳の時に他界しています。初めて寄宿制学校に入ったのは5歳の時でした。自分のコミュニティ、居留地、家庭を離れて知らない土地に行くことはなかったのも、とてもトラウマになり、カルチャーショックを受けました。その異国の場所には、異国の言葉と異国の食べ物がありました。私は1957年から1965年までの8年間、寄宿制学校にいなければなりませんでしたが、しかし、長くいても、自分の言葉であるオジ・クリー語を忘れることはありませんでした。5歳の時に、祖父母とコミュニケーションをとれるために必要と思ったので、自分の言葉を忘れないと自分に誓いました。夏の2ヶ月間、寄宿制学校から帰ってくると、ほとんどの子どもたちが自分の言葉を忘れていました。私は自分の言葉を覚えていたので、家にいる時、他の子どもたち、友人やいとこたちが、彼らの家族や祖父母

と話すために通訳しなければなりませんでした。1887年に最初の寄宿制学校が開校し、最後が閉校したのは1996年です。教会は、「子どもの中のインディアンを殺す」ための教育方針を認めるようになりました。

帰ってから、1971年から1979年にかけて、祖母たちの伝統を学びました。その一つは、今日、助産師として知られている、新しい命の誕生を手助けする活動でした。英語の読み書きと会話ができたので、16歳の時にノース・スピリット湖の初代コミュニティ保健医療担当として雇われました。まだノース・スピリット湖に地域看護師や医師がいなかった時代のことです。私は医療の第一防衛線となり、祖父母の伝統的な教えを学び直しながら、コミュニティの中で生きていくことになったのです。コミュニティ保健医療担当の仕事の一つに、出産の手伝いがあります。初めて出産の立ち合いでは、2人の祖母がそばにいて、一步一步指導してくれました。最初に誕生を手伝った赤ちゃんの名前はホーマー・ミーキスでした。とても弱った体で生まれ、体重はたった2キロでした。生まれた夜、生き延びるために闘っていました。脱水症状がひどく、息も切れていました。翌日、ある長老が両親と話すために来て、前日に生まれた男の子の夢を見たと言いました。その長老は、夢の中で、その男の子を、生涯で多くの喪失を経験した人のおく必要があると告げられたように言いました。喪失感や絶望感を味わっている人の下にその子をおくようにと。両親は、赤ちゃんを私に贈るように決めました。この男の子は、私の長男で、現在ノース・スピリット湖ファースト・ネーションの評議員を務めています。長老たちが、かつて私の民族にとっていかに重要であったかということについて、喜んで質問にお答えしたいと思います。

1982年に、当時の夫から受けた身体的な暴力のため、外部の支援を求めました。1983年に、スー・ルックアウトの病院で精神保健福祉ワーカーとして仕事に就き、コミュニティを飛び回り、被害者の話に耳を傾けました。多くの医師や精神科医と一緒に仕事して、専門家からたくさん学びました。あの時に生きた世界はとても辛く、自分の居場所が分かりませんでした。自分のコミュニティに帰ったり、また外の世界に戻ったりしました。長年、家族と一緒にあっちこちに引っ越し、子どもたちは私の旅に付き合ってくれました。

1994年に、女性として初めてノース・スピリット湖の族長になりました。リーダー的な立場の女性を認めない男性も多い中、コミュニティの長として様々な困難に直面しました。ノース・スピリット湖は、薬物やアルコールが禁止されている禁酒コミュニティです。当時は、依存率は非常に高く、コミュニティ内の薬物及びアルコール危機に取り組む使命を掲げました。寄宿制学校で受けた虐待のせいで、自分が何者なのか不安になることもよくありましたが、コミュニティをリードするためには強くあり続ける必要があることが分かっていました。これらの経験は、コミュニティのニーズをより理解する上で役に立ちました。寄宿制学校を生き延びたコミュニティの人々は、私一人ではないと知っていました。そこで、私のような問題を抱えている人たち、つまり寄宿制学校における情緒的、精神的、スピリチュアル、性的、身体的な虐待に苦しんでいる人々を支援することが自分の使命になりました。彼らを助けるには、まず私自身を助けなければなりませんでした。それはとても難しいことでした。いつも許すように言われますが、自分が経験したことを一生忘れられません。この辛い過去を決して忘れず、今もなお痛み続けている人々を支援したいことが、今日に至る私の目標です。

72歳になった今、ドライデン高校で長老として活動し、キーウェイティヌーク・オキマカナックの6つのコミュニティ出身の生徒が高校卒業資格を取得できるようサポートしています。キーウェイティヌーク・オキマカナックを構成する北部の6つのコミュニティは、ポプラ丘、ディア湖、ノース・スピリット湖、キーウェイウィン、フォートセヴァン、マクダウェル湖です。支援する生徒は、13歳から21歳の若い男女です。私の役割は、文化の教えや言語を生徒の日常生活に取り入れることです。また、知識を共有し、他のドライデン高校生にもキーウェイティヌーク・オキマカナックの伝統を教え、私たちの民族が幼い頃にコミュニティから連れ去られ、寄宿制学校に通わされた中で経験したことに対する意識を高めることです。この仕事をすでに8年間も続けてきています。この2年間で、私のビジョンを実現するために、チーム内の成長を実感しています。私のビジョンとは、ファースト・ネーションと非ファースト・ネーションの人々の間で関係の再構築を促し、未来の世代のために共に調和して生きることです。肌の色で判断するのではなく、異なる文化を認め、尊重することです。北方の孤立しやすいコミュニティから来た生徒たちが、ドライデンにいる間、安全で快適に過ごせるよう支援したいと思います。私たちはチー

ムとして、これを、彼らがどこから来たのかを思い出し、土地に根ざした異なる生活様式を受け入れ、感謝するようになることで、達成できるように努めています。彼らを変えるのではなく、ここにいる間に教えることです。ダリル・ノーマンとレイチェル・ルーガリーは、私の同僚と友人で、この旅を通して私を支えてくれています。

私の人生について語れることはたくさんあります。聞いてくださっている皆さんには、私の支援実践において自分の人生経験をどのように活用してできたのか、気軽に聞いていただければと思います。

ありがとう。ミーグウィッチ（オジ・クリー語）。サンキュー。